●春日部市民文化講座（第 33 回）　「高山右近の茶の湯の考察」

◆日時：2020 年 7 月 29 日(水)　10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■高山右近の友・内藤如安

「高山右近の茶の湯の考察」というお話を進めてまいります。高山右近は、日本列島を捨てた人なのですが、素晴らしい友だちがいたのですね。一緒に苦しみ、一緒に悲しみ、一緒に日本を捨ててマニラに行き、一緒に死んでいく友がたいのですよ。さらに家族にも恵まれました。その人は、ほとんどの人には知られていないのですが、**内藤如安(じょあん)**という人です。この人は、松永久秀の弟の子で、小西行長に仕えた後に浪人となり、高山右近が前田家の客将となると、高山右近を追って金沢に行き、前田家の客将となって金沢で教会の建設や布教活動を熱心に取り組み、家康からのキリシタン追放令が出ると、高山右近とともに家族と一緒にマニラに行くのです。その内藤如安の**娘ジュリア**は、マニラで女子修道院(聖ミカエル会)を造るのです。そうした友人がいたのです。

■メメント・モリ

今、新型コロナウィルスによる感染症で多くの方が亡くなっています。パンデミックですね。100 年前の「スペイン風邪」もそうでしたし、ヨーロッパでは「黒死病・ペスト」が 3 回くらい流行って多くの方が亡くなっているのです。その時に、ヨーロッパの人々や教会が考えて哲学が**「メメント・モリ」**なのですね。「メメント・モリ」というのは、**「死ぬことを畏れるな、だから自分たちの今生きていることを大切にしようぜ、明日は死ぬんだから」**ということなのですね。

■高山右近の生き方における「メメント・モリ」

高山右近という人は、ずうっとその**「メメント・モリ」**を考えていましたね。死ぬということを忘れないでいて、その時その時を一生懸命に生きた人ですね。人間の死というのは誰もが絶対に直面することなのです。でも、日本人はその「死」に対しては非常にぼけているのです。その背景が**「無常観」**という哲学なのです。それは「あきらめ」です。でも、高山右近はそうではなかったのですね。自分が殺されるようになったら、死に直面してもそれを受けとめる覚悟を持っていました。その覚悟が、彼の生き方であり考え方であると思います。

■高山右近の周りの人々の謎

古田織部ということは不思議な人で、徳川家康によって秀忠の茶の湯指南役になるのですが、最後は切腹を命じられて自刃するのです。お家断絶で男子は全員が殺されているのです。女子は生きることを許されていますが。でも、何で古田織部が切腹を命じられてお家断絶まで追い込まれたのかということについては全く謎なのです。

もう一つの謎は、**織田有楽斎**です。織田信長の弟として生まれ、本能寺の変では命からがら生き延び、信長の家臣であった秀吉に仕え、その秀吉を滅ぼした家康にも仕えて亡くなったのです。この人の生き方も不思議ですね。正伝永源院には織田有楽斎のお墓があるのですね。この正伝院が彼の隠居後に住んだ場所ですね。織田有楽斎という人は 75 歳で畳の上で死んだのですね。戦国武将にとって、畳の上で死ねるというのは憧れであったでしょうし、彼は最後まで茶人として往生しています。彼が造った茶室が「如庵」ですから、隠居して茶の湯に専念して老後を過ごしたのですね。江戸時代になると、利休七哲の中に織田有楽斎が入っていたこともあるのです。高山右近には、古田織部や織田有楽斎のように茶人として心ある友がおりました。

■高山右近を茶の湯に導いたのは？

高山右近を茶の湯の道に導いたのは、**荒木村重**です。この荒木村重という人は、織田信長を裏切っているのですね。そして、信長に家族が殺されても、自分だけ生き延びて毛利家に逃れていくような人なのです。本能寺の変で信長が亡くなると、秀吉に召し出されて御伽衆の一人として京都に出てくるのですね、その時の名前が道薫(どうくん)ですが、一時は家族を殺してしまったことを恥じ入って道糞(どうふん)と名乗っていたのです。そういうことを名乗る人というのは、結構芸術家タイプにはいらっしゃいますね。荒木村重は秀吉よりも早く茶の湯を学んでいたようですね。そして、利休の弟子として茶の湯を学んだとされていて、彼が推薦して高山右近は利休の弟子になったのではないかと言われていますね。もう一人は、**松永秀久**です。常に反乱が大好きで、下克上の典型、戦国時代の先駆者のような人です。最後は、悲惨な死を遂げているのですが、だからこそ、利休の茶に惹かれたのですね。この人は、信長が茶道具を家臣に分け与えたり、茶会の開催を許したりする茶の湯制度を取り入れる前から、既に茶の湯制度を取り入れていましたし、茶の湯名物を収集していました。ですから、信長の敵ではありましたが、信長が茶の湯制度を取り入れたのは松永弾正の真似をしたのではないかと思ったりしますね。ですから、名物として有名な「九十九茄子茶入」「平蜘蛛釜」という素晴らしい道具を所持していました。この松永久秀も高山右近に影響を与えていたと思われますね。それは、みんな畿内の武将ですので、天皇を守る武将だったのです。このように高山右近に千利休を引き合わせて茶の湯の世界に誘い込んだのは、荒木村重と松永久秀の二人だと推察されます。

■高山右近が茶の湯と出合った堺

この二人の武将は、共に堺の商人と仲が良かったのです。戦国時代の堺は、武士に頼らずに自分たちの都市を守る自治組織を持っていたのです。会合衆と呼ばれた富裕な商工業者たちが自治組織をつくつて市政を運営していました。その中の一人が**千利休**であり、屋号は**「魚屋（ととや）」**といって塩魚を独占的に扱う商人ないし、そういった商人たちに倉庫を貸す問屋だったとされています。しかし、その商売の仲でも一番利益のあった商売は武器商売なのです。 堺の商人達たちは、ポルトガル人が持って来た鉄砲を鍛冶職人たちに分解させて、それぞれのパーツに分けて得意な人たちに造らせて組み立て、いち早く命中率の高い鉄砲を完成させたのです。鉄砲が種子島に伝来して 2 年後には堺での鉄砲が完成しているのです。そういう所を戦国武将たちは狙い、信長はいち早く堺を押さえたのです。その中の一人として千利休がいたのです。たぶん信長が押さえたという面もありますが、堺の商人たちがすり寄り押さえられたという商人魂もあったのだと思います。表千家では、**「織田信長黒印状」**〔写真：北山会館 HP〕といって千利休が鉄砲の玉千個を信長に贈った時に、礼状として贈られたものがあります。これは利休が武器商人であったという証文です。でも、三千家では侘びを大切にしていますから、侘びと鉄砲では大きな差があるので、声高には言いませんが、利休さんにはこうした一面もあるのです。利休さんという人は、「侘び」という世界でも極めていきますが、「鉄砲」を通じた商売という世界でも極めていく人だったのですね。それと同じ事が「黄金の茶室」と国宝「待庵」に見られると思います。

■利休七哲

千利休の茶は、当時**「りくうの茶」**と呼ばれ、それ以来三千家に引き継がれてきた**「侘び茶」**であり、彼は侘びの創造者であります。その人の手となり、具現者が**長次郎**です。ただ長次郎のことは良く分かっていません。利休と長次郎との交流はもの凄いものであったと思うのですが、学者肌の先代・樂直入さんも解き明かせないでいます。千利休と長次郎が何処で出会ったかさえも謎です。三千家の御用学者の多くは「たぶん京都だろう」と言っているのですけれども、樂直入さんは場所を言っていませんが「韓国人説があるけれども中国出身の父・あめやと母・比丘尼の間に生まれた」と言っています。共通していることは瓦屋さんだったということです。そして、利休さんから数えて、少庵、宗旦、そして表千家 4 代目の江岑宗左は、はじめて利休さんには 7 人の高弟がいましたと言って**「利休七哲」**のことを「夏書（げがき）」に遺しました。そこには、**蒲生氏郷を筆頭に、2 番目が高山長房（右近/南坊）、3 番目が細川忠興（三斎）、4 番目が芝山宗綱（監物）、5 番目が瀬田正忠（掃部）、6 番目が牧村利貞（兵部）、最後が古田重然（織部）**です。町人の利休の弟子が、みんな大名なのですよ。これは面白いでしょう。そして、最後が**古田織部**で「茶之湯無能候、併後、惣和尚二成被申候」（茶の湯は無能にてござ候、その後、天下の惣和尚になって候）とまで書いているのですよ。短い文章であるにも関わらず、織部だけにはこうした断り書きをしているのです。そんな古田織部については、**「へうげもの」**（山田芳裕作）という漫画が出ていて、その中では、秀吉の命によって古田織部が利休自刃の時に介錯役として利休さんを殺しているのですよ。皆さん、漫画を馬鹿にしちゃいけないですよ。緻密な時代考証も行われていて、当時の武将たちの生き様が良く描かれています。

■利休の切腹、千家の断絶

この利休七哲の中で、細川忠興以外は洗礼を受けているキリスト教徒です。その中で強烈なキリスト者は高山右近でした。彼は、世俗的な欲望とは握手をしない人でした。殺すぞと言われても、自分が正しいと思うことであれば、どうぞとその身を投げ出せる人でした。全く言い訳もしませんでした。そのことに関しては、千利休もそうでした。秀吉に殺すぞと言われた時に、周りがこぞって詫びを入れるように言ったのですが、「頭下げてまでこの命惜しからず」と言って、商人でありながら切腹を命じられて、自刃して果てるのです。その首は一条戻橋の所に晒されていたのですよ。この時に、千家はお家断絶で滅びたのです。

■高山右近の毅然とした生き方こそ魅力

高山右近の毅然とした生き方と、千利休の毅然とした生き方の中にはダブって共鳴するものがあります。そこが、ぼくには魅力的なのです。ぼくたちに魅力がないのは、生き方、覚悟がボケているのですよ。本当の教育というのは、親が家庭の中で揺れ動きボケないことだと思います。自分の思いを貫くことだと思います。自分の都合のいいことをその時、その時に言っていると、子どもはそれを読み取って、親を信用しなくなってしまうのです。そうすると、周りに動かされるような本当の自分を失った生活をしてしまいますね。まさに、今の時代はそうではありませんか。特にメディアだとかに踊らされて、本当の自分の考えで行動ができていないのですよ。悲しいことですね。

■利休七哲の筆頭・蒲生氏郷

表千家 4 代の江岑宗左は「**江岑夏書**」の中で、利休の孫である 3 代宗旦が言い遺した言葉として「**利休七哲の筆頭は蒲生氏郷**」と書いているのですが、ぼくは表千家にあるいろいろな文章などを見ても筆頭は高山右近だと思うのですよ。でも、利休が切腹しお家断絶となった千家で、連れ子だった少庵が会津若松の蒲生氏郷の領地に蟄居させられるのです。蒲生氏郷は、近江の出身で戦功を立てて伊勢松ヶ島城主になり、その後、奥州の伊達家の備えとして会津に転封されます。その時に、千家断絶を忍びなく思い少庵を引き取ることにしました。1591 年のことです。会津に移った少庵は、鶴ヶ城内に茶室「麟閣」を造るなど、氏郷に守られて過ごしました。蒲生氏郷は、その後、文禄の役などで肥前名護屋城に参陣しますが、体調を壊して会津に帰国、その後、京伏見の蒲生屋敷にて 1595 年 2 月に亡くなるのです。その亡くなる前年、少庵が会津に行って 3 年後の **1594 年には、徳川家康と蒲生氏郷の嘆願によって、千家の再興がなされます**。同時に大徳寺に預けられていた少庵の子・千宗旦も京に戻るのです。こうした経緯があるので、千家再興の恩人として七哲の筆頭というのも頷けます。この時の**高山右近**は、1585 年に播磨国明石郡 6 万石の主となったのですが、1587 年に秀吉からバテレン追放令が出されて、領地と財産を全て捨てて小豆島、肥後の小西領で匿われて、最後は前田利家に招かれて前田家の客将として 1 万 5 千石をもらって暮らしていました。家康による国外追放が **1614 年まで約 25 年間にわたり前田家の客将**を務めます。本来であれば、前田家の武将たちとぶつかることも考えられますが、高山右近は非常に信頼されてぶつかることなく、政治や軍事の相談役になっていたようです。七尾市には、「ゼウスの塔」や高山右近の修道所跡、日本訣別を記した高山右近書状などが残っています。前田利家、利長と 2 代にわたって前田家は高山右近を守りました。

〔徳川家康と蒲生氏郷の連盟で千少庵に宛てた「少庵召喚状」【大意】(秀吉様の)御意として申し入れます。あなたを召し出されるとの仰せですので、急いで上洛してください。そのことを申し伝えます。表千家不審菴 HP より引用〕

■南坊として暮らした高山右近

加賀藩で客将となった高山右近は、前田利家・利長という守護者に守られ、南蛮寺を造り、金沢城の修築、高岡城の築城など重要な仕事を任されてしっかりと行いました。ですから、それまでの一国一城の主であった時代よりも自由にやりたいことをやっています。その時の号が「**南坊(みなみのぼう、なんぼう)**」で、南蛮坊主(宣教師たち)のように生きたいなという願望を込めた意味なのです。彼は本当に金沢の地で、教会を造り、宣教師を呼び、クリスマスも行い、修道院も造り、家族ぐるみでキリスト教会に仕えたのです。ところが、豊臣政権から徳川幕府に代わり、秀吉の感覚で作られたバテレン追放令は、さらに強い禁教令として公布されたのです。良い政治家には、良い哲学者や宗教家がいるのですが、その一人が南禅寺の**金地院崇伝(こんちいんすうでん)**です。徳川家康が幕府の下で泰平の世を作るためにはどうしたら良いかという草案を作ったのです。この崇伝さんが中心となって、江戸幕府の法律の立案、外交の在り方、宗教統制などを見当した中で、日本人の思想の中ではキリスト教は御法度となったのです。宣教師たちもスペイン、ポルトガルからのダメだということになり、**1613 年に「禁教令」が公布**されたのです。このようにキリシタンは邪教だという法律が出された後でも、高山右近は金沢で伝道していたのです。秀吉の時代から徳川の初期までは、バテレン追放令が出たり、禁教令が出されても、諸大名が力を持っていた頃は、そこまで幕府も強く禁教を命ずることはできなかったのですが、さすがに天下泰平で徳川幕府の体制が確立されてくると、さすがの前田家でもかばいきれなくなっていくのです。そこで、高山右近は家族や、内藤如安たちと一緒に宣教師と同じように**国外追放**となったのです。それでも、彼らは国外追放という措置を全く苦にしなかったのです。皆さんなら、そんなことに堪えられますか？　それは計算されたものではないのですよ、どう生きるのかということが試されているのです。**その時に試されるのが「覚悟」なのですね。生きることの覚悟、死ぬことの覚悟が高山右近はできていたのです**。これにはぼくもシビレましたね。

■捨てることと見つけたり

利休七哲に「**利休の侘び茶とは何ぞや？**」と問うたら、**高山右近は「捨てることと見つけたり」**と言うでしょうね。これは難しい哲学ですよね。利休七哲の人たちは利休の侘び茶を深めれば深めるほどに、「捨てること」だなと学んだと思います。ですから、利休の茶の改革の一つは、室町時代の公家さんや大名たちが楽しんできた書院の茶から、「待庵」に象徴されるように二畳と狭く、荒壁で、室内の角に炉が切られた、全部を取り去られた空間、さらに利休さんは一畳半まで狭めていったのです。

■**捨てることは清さ**

今、ぼくが考えている侘び茶とは、利休の茶とは何かというと**「捨てることは清さ」**なのです。ちょっと分かりにくいですよね。ぼくが強調しておきたいことは**「清い命」**です。利休さんは、その「清い命」を構造的に作り上げていったのです。「露地」を造り、蹲踞を置き、亭主はお客様に聞こえるように清い水を流し込みます。そして、黙って下がります。そうすると、お客様は蹲踞で蹲って手を清め、口をすすぎ、清められた思いで茶室に入っていくのです。茶室に入る時に身分や立場を捨てるように工夫されたものが「刀掛け」です。革命的な技ですね。武士の命でもあった刀を自然と外して置いていかないと躙り口からは入れないのですよ。大男の千利休がやっと入れるくらいの空間なのです。しかも躙らないと入れないのですよ。これは、茶室の中ではみんな一緒だよという平等性の象徴ですね。身分も肩書きもみんな取り去って一緒だよというのです。それは命令ではなく、謙虚に作り上げた利休の技なんですね。秀吉もそれを受け入れてちゃんと躙り口を通って茶室に入って、そしてもてなしを受けているのです。そういうことを侘び茶の権威者として定めたというところが、利休の凄さですね。

■**高山右近の見舞い**

蒲生氏郷が伏見にいて病いで伏している時に、高山右近が金沢から見舞いにくるのです。それは、蒲生氏郷が出世と信仰との間にあって、信仰が疎かになっていたのですね。それを知っていた高山右近は、病気が重くなっていた蒲生氏郷にキリスト者としての信仰を取り戻させるためにやってきたのです。そして、蒲生氏郷は信仰を取り戻してキリスト者として天に召されていくのです。

■**千少庵と高山右近の出会い**

ここからは、ぼくの想像なのですが、高山右近が蒲生氏郷の伏見屋敷に何度か見舞った時に、氏郷が亡くなる前年（1594 年）に**『少庵召出状』**が出されて会津から京に戻ってきた少庵と大徳寺から戻ってきた宗旦が氏郷邸にお礼に行って、そこで高山右近と出会ったのだと思うのです。そこで少庵から右近に対して「今度、一服差し上げたいのですが、拙宅にお越しいただけませんか？」とお声かけして、それが実現したのです。京都の少庵の屋敷の茶室で、少庵が高山右近をもてなし、そこには少庵の息子・宗旦も相伴（同席）して感謝の茶会をしたと書き残しているのです。ストーリーとしては、千利休が切腹して、蒲生氏郷により千家は守られた。一方、高山右近は前田家により金沢で守られたのですね。そして、千少庵と高山右近が出会い、茶席を持つことができ、**千家の「侘び茶」が復活した瞬間**ですね。その中心にあったのが、茶会なのです。

■**織田有楽斎の茶の湯**

最後に**「織田有楽斎の茶の湯」**について申しあげたいと思います。織田有楽という人は、武将の中でも名門ですよね、織田信長の弟ですから。それが、本能寺の変で信長が亡くなると、家臣であった豊臣秀吉、さらに徳川家康に仕えて、最後は京都の屋敷で亡くなりました。その織田有楽斎が茶人として次のようなことを言っているのですね。**「右近の茶には大病がある。右近は所作も思い入れも良いが、清の病があって、露地のほとりはもとよりのこと、脇々の下まで掃き清めて掃除に際限がない。この行き過ぎた清潔は、真に清いことを知らないからである」**（『喫茶余録』、1829 年）と評していたと江戸時代になって書かれているのです。このまま読めば、織田有楽斎に言わせると高山右近は潔癖症で、侘びが分かっていないんだよ、と読めるのですが、そうすると織田有楽斎が身につけていた「侘び」って何だったのだろう、高山右近とどう付き合っていたのだろうかという疑問が湧いてきます。

■**「福者」高山右近**

しかし、織田有楽斎が茶室「如庵」を造り、謎の三角形に仮託信仰物があって**織田有楽斎が同じキリスト者**であったとすれば、高山右近の茶の湯に対する憧憬、おれにはまだ無理だなぁ‥という感情が**「清めの病い」**という言葉になって現れたのだろうと思います。キリスト教は邪教の時代ですから、自分がキリスト教のことを言うと疑われ直接的な言い方ができなかったので、こうした言い方をしたのだろうと思います。そして、自分の本心をさりげなくぼくたちに伝えてくれたのだと思うのです。**高山右近の茶の湯は捨てること、切り捨てること**によって、いつも本当のことを求め続けていた。足すのではなくて、消していくこと、**最後の最後はメメント・モリ「死を忘れることなかれ」です**からね。全部消し去らなくてはいけないのですよ。だから茶の湯でおもてなしするときに、ただの趣味として行うのではなくて、この一碗に自分の存在を懸けて召し上がっていただく、出された方も亭主の覚悟を知っていただくときに、利休さんが求めていた茶室の中での**「和敬清寂」**が完成するのです。ここに「清」が入っているのですよ。だから、ぼくたちは楽しく、笑いながら茶の湯に向き合うときも、茶人として世俗的なものを捨てていくことが大切ですよね。戦国時代に高山右近は、信仰によって全ての世俗的なものを捨てていきました。それをカトリック教会は数年前に顕彰して、**死後その徳と聖性を認められた信者として高山右近に「福者」の称号を授けました。**

髙橋先生から「メメント・モリ（死ぬことを忘れることなかれ）」という言葉を伺い、自分の覚悟が問われました。